

実験レポートの日本語に関する注意点

2021年4月1日

京都産業大学

情報理工学実験

1. 自分の言葉・表現で書くこと

自分が作成するレポートの文章に、**教員が準備した実験資料や Google で検索した Web サイトの文言をそっくりそのままコピペする学生が多い。それは、ルール違反である。**著作権の侵害にあたる。一般的な内容で、誰でも知っていることであっても、第三者の文章をそのままコピペするのはよくない。自分の言葉・表現に置き換えて書くこと。自分の言葉で表現できないということは、結局、理解できていないのである。

コピペが許されるのは「引用」の場合である。その方法については、下の「4. 参考文献の引用の方法」で説明している。

2. 剽窃・盗作、未提出

「剽窃」という言葉は、他人の文章や語句、表現などを自分のものであるかのように使うことである。実験レポートでのコピペを剽窃とまで呼ぶかどうかは、程度問題ではあるが、かなりの部分について**第三者のレポートを自分のレポートにコピペして提出したことが露見すれば、実験全体の評価が「K（棄権）」**となる。また、レポートの未提出が一つでもあれば「K（棄権）」となる。

3. 常識としての理系文書

- ① 段落の先頭は1文字空けること。また、一文ごとに改行しないこと。文末で改行するのは、段落の末尾だけである。（これが日本語のルールであるが、最近の文書では、段落の先頭を1文字下げる代わりに、段落と段落の間に空行を入れることも普通になりある。）
- ② 「だ・である調」を使うこと。
- ③ 主語と述語の対応をはっきりさせること。述語は主語の性質や状態を述べる部分である。また、修飾語を被修飾語のそばに置いて、それらの対応を明確にすること。
- ④ 実験レポートはそれにふさわしい語を用いること。「**一語・一意**」を意識して、意味が曖昧な単語を使わないこと。
- ⑤ 一つの文に多くの意味を詰め込まず、簡明な文に分けること。「**一文・一論理**」。それを重ねることで、多くの意味を伝えること。

- ⑥ 一つの段落を一つの意味のまとまりにすること。「**一段落・一命題**」。
- ⑦ 5W1H（「誰が（Who）いつ（When）どこで（Where）なにを（What）なぜ（Why）どんなやり方で（How）したか」）を書くことが報告書の基本である。
- ⑧ 報告する数値の有効桁数は測定装置の精度によって決まるので、**無用に長い桁数にしないこと（有効桁数がわからない場合、小数点以下は2桁か3桁にすること）**。
表などで数値を縦に並べる場合は、小数点の位置を揃えること。

4. 参考文献の引用の方法

実験レポートにおいて、文献やWebサイトを参考にして書いた、あるいはその文章をそっくりそのままコピーしたのであれば、その場所に文献番号を「[1]」のように書き足すこと。そして、参考文献のリストを実験レポートの末尾につけること（「実験レポートのフォーマット Word 版.docx」で説明している）。

参考文献をつける必要があるのは、その文献に独創的なアイデアが記述されており、それに言及する場合や、文学作品などに見られる独創的な表現をそのまま引用する場合である。厳密に言えば、文献に書かれていることが一般的なことで、その内容を自分の言葉で記述するような場合には、参考文献としたり、引用する必要はない。しかし、**実験レポートの作成は理系文書作成の練習であるから、必要を感じた場合には参考文献として挙げ、それを引用すること。**

5. 提出前に一度は読み直し、誤字などの単純な間違いを修正すること